

## 尾崎紅葉にみるホーソーンの影

—— 罪の意識をめぐって ——

仁 木 勝 治

尾崎紅葉、(慶応三年十二月十六日—明治三十六年十月三十日、一八六七—一九〇三)は明治三十年(一八九七)年、三十歳の時、のちに広く人々の間に流布することになる「金色夜叉」前編を「讀賣新聞」から連載しはじめていく。しかし「金色夜叉」で広く人に知られるようになった紅葉も、明治三十六年、癌という病魔におそわれながら三十七歳という短い生涯に人生の幕を閉じることとなった。その生涯をひるがえってみれば、紅葉は明治十五年十六歳のときに三田英學校へ入学すると、ここで英語を学んで大学予備門への入学を志した。当時、大学へ入るには専攻のいかんにかかわらず、かなりの語学力が要求された。紅葉はこの頃からすでに語学を通して、当時、一世を風靡していた外国文学に大きな興味と関心をいだき、それらの素材を抽象的にはあるが、かなり自己の内に取り入れていたのである。現に、彼の外国文学への関心については紅葉の研究家として知られる福田清人も、

紅葉は西鶴等日本の古典にも親み、それから表現を學ぼうとした以外に、外國の小説もかなり讀んでいる。しかしそれは文學精神にふれるというよりも、筋をとろうという関心からであった。すでに「やまと昭君」につい

ては記したが、「むき玉子」(二十四年)もエミール・ゾラの作品を原作とし、「二人棕助」(二十四年)はアンデルセンの「大クラウスと小クラウス」、「令熱」(二十七年)「三箇條」(二十八年)は「デカメロン」、「夏小袖」(二十五年)「戀の病」(同年)はモリエール、また「隣の女」(二十七年)もゾラの翻案で、「浮木丸」(二十九年)もグリムの翻案とされている。これらの中にはその巧みな翻案技術で、原作を氣づかせないものもある。(1)

と述べている。しかもこの期の紅葉の作品の基調はおりの鹿鳴館時代の風潮を反映して、清新な洋風趣味の当世的風俗小説を展開していた。

そもそもホーソンについての、わが国への紹介はすでに、明治十一年から十三年にかけて中村正直の訳によって、『西洋品行論』という書物でなされていたが、明治二十一年にも「女学雑誌」の「叢話」の中にある「文人記者の伧儷」(つづき)において次のように紹介されている。

小説家ハウソルン一日其の役を免ぜられ快々として家に歸る細君迎へて之を室に通し熟ら其容姿を伺ふに異状あり左りとて暴りにも聞かず懸念佇立して傍らに良人の機嫌を伺ふにハウソルン遂に實を告げて

今日お役御免に為った

と言ふ細君静かに室を出て薪一杷を提げ來り之をストーブに投じて温かく火を燃やし筆、墨、紙を良人の目前に置き後ろに廻わつて双の織手を其の肩に安けり良人振り返りて其の愛妻の顔バセを見るとき細君の云く

今日よりこそ著作出來候はん

とハウソルンの憂雲乍まち散ず即日筆を起して草稿に掛り後遂に彼の有名なるスカーレットレッター(赤字談)

の小説をバ作り畢んぬ、世上の文人記者其の伉儷の間だを宜しく如此く為し玉ふべき也。<sup>(2)</sup>

ホーソンについてのこのエピソードは、今日でもよく知られている。「David Swain」の訳「夢ならぬ夢」も、その題名からして察せられるように紅葉の「夢中夢」(明治二十一年)をどことなく彷彿とさせるところがある。ホーソンの作品が明治二十二年から二十七年にかけて、「夢ならぬ夢」だとか「心の浮画」、あるいは、「黒頭巾」、「腹中の蛇」といったタイトルで翻訳されていたが、一方、紅葉もまた同じころ「心の心」を明治二十七年一月一日「読売新聞」に書き、そこで心を「あゝ解った、黒縮緬の背守」だといって、その心がまるで「黒いヴェール」(“Black Veil”)に覆われてでもいるかのようにのべ、心の雰囲気を表すものとして取り上げている。これはホーソンが“Black Veil”の中<sup>(3)</sup>、「さらに近づいて見る」と「縮緬を二重に折ったもの」(two folds of grape)に見える、という言葉からも、紅葉の言う「黒縮緬」がホーソンの言う「黒いヴェール」の中の「縮緬」と何らかの関係があることを示唆している。また、「夢中夢」(明治二十一年)を書き「心の浮画」の翻訳を読むことによって、紅葉はホーソンの作品の雰囲気を一層色濃く己の作品の雰囲気に近づけるようにしていったと思われる。特にホーソンの「心の浮画」では宗教的な「罪とは何か」という問題が取り上げられ、揺れ動く心の襞が深く見つめられている。ここで言う罪は、広義的な意味で、おおむね、宗教的な心の問題と考えてよい。まずホーソンの「想像の見世物箱」(“Fancy’s Show Box”)の原文と湘川漁夫の翻訳による(漁史と漁夫は同一人物で、大島正健のこと)「心の浮画」の一部をここに少々長くなるがあげてみる。

What is guilt? A stain upon the soul. And it is a point of vast interest whether the soul may contract

such stains, in all their depth and fragranciness, from deeds which may have been plotted and resolved upon, but which, physically, have never had existence. Must the fleshly hand and visible frame of man set its seal to the evil designs of the soul, in order to give them their entire validity against the sinner?....Memory was turning over the leaves of her volume, rustling them to and for with uncertain fingers, until, among the earlier pages, she found one which had reference to this picture. She reads it, close to the old gentleman's ear; it is a record merely of sinful thought, Memory is reading, Conscience unveils her face, and strikes a dagger to the heart of Mr. Smith. Though not a death-blow, the torture was extreme. (4)

罪は如何なる物なるぞ、人の心の汚點の痕、さらばいかな事なるぞ、外に現れ見えずとも、潜に計り企てつゝ、心の内に隠れ居る、邪なる念をさすなるか、又は手の上に出で來りて、免るゝ方のなき迄に、其迹の既に顯なる、悪しき業をば言ふたるか。……「記憶」は覺束なき様子にて、帳面を一枚々々繰り居し、舊き筆迹の中にて漸く探し當り、老人の耳に口をよせ「是は行には出でざりしが、曾て心に浮みたる、悪し念の姿なり。」と讀みきかすれば、傍なる「良心」は、忽ち外套を脱ぎ去つて、顔を現はし懐なる劍を抜く手も見せずスミスを執へて胸の邊をしたゝか刺せば、命に係る程ならぬも、悶え苦む有様は、深手の傷としられたり。(5)

ここに言う「罪とは何か」という問題や「行には出でざりしが、曾て心に浮みたる、悪し念の姿」として扱う「記憶」、さらにきわめて宗教的色彩の濃い「良心」といった問題は、紅葉が明治二十二年に発表した「二人比丘尼色懺悔」において、すでにその萌芽を見せている。この作品の中で彼は、人里を離れた谷陰の庵で偶然に出会った二人の

若い尼が、はからずも一人の若武者を愛していたことを知り、その話を「愛」と「悪」の狭間で苦しむ若武者の姿が描かれている。次の場面は、話の途中から二人の尼に愛されていた若武者の悲運が直接に描出されたところである。

守眞が氣を損じてはと。こは、ぐながらいふ怨言うらみごころ。氣を損じてはと。斟酌しんしゃくするは「愛」怨言は「悪」水火のやうな「愛」と「悪」を。加減する處おとめごころ女に心。何處どこまでも悪にくからぬもの。守眞が答へ應こたへといはば。我身を辨護かばへども……道に背く。否いなといはば。道に合へど我身に裏切る。思案に暮れて口を閉ぢしが。露を厭きらふも濡ぬれぬ前さき。我身を裏切うられ……道(6)に合へ。

ここで言う「道に背く」や「我身に裏切る」行為は明らかに宗教的な「良心」に関わる問題である。人間の「罪」とその結果について書いたホーソンのことについては、「二人比丘尼色懺悔」が発表される一年前、明治二十一年にすでに前述したように「女学雑誌」(二月四日刊行、第九十五號)中の「叢話」において言及されていたし、また翌二十二年一月にはすでに『二度物語』(Twice-Told Tales, 1842 増補)の中の「Fancy's Show Box」が「心の浮画」という訳名で翻訳されていた。セイレムの税関吏の職についていた彼が政変により、再びその職を失い家に帰ったとき、妻のソフィアが、これで何にも煩わづらわされることもなく創作に打ち込めますね、といって、ホーソンを励うましてくれたというエピソードは、すでに明治のはじめにわが国に紹介されていた挿話である。それ以来、ホーソンは一八四七年から着手していた『緋文字』(The Scarlet Letter, 1850)の完成に取り掛かったのである。

わが国におけるホーソンの関心が明治二十年代から少しずつ高まり、訳も幾らか出始めていたことは、先にあげた「David Swan」(1837)の「夢ゆめなふぬ夢」や「Fancy's Show Box」(1837)の「心の浮画」などからも明らかで

ある。<sup>(7)</sup> そのことをさらに進めてみれば、翌二十三年、「The Celestial Railroad」も「新大路歷程」として「女学雑誌」<sup>(8)</sup>に訳出されていたのである。そのような状況から見れば、当時、外国文学に興味をいだき、また、外国文学の押し寄せる波に否応なく洗われていた紅葉の目にホーソーン作品の翻訳や紹介文が留まらなかったはずはない。

ホーソーンと紅葉との関係は、明治二十八年三月「帝國文學」(第三號)でも次のように記されている。

紅葉氏は明治の奇才、生平抱負頗る大なり。小説に於て多く歐米に遜色無しと稱す。抱負の大なる固より妨げず、而かも予輩は氏に於てディッケンスを見る能はず、ユーゴーを見る能はず、ホーソーン、サッカレーを見る能はず、其著作概ね繊巧、其人物多くは浮薄、酒脱磊落の妙あるも沈痛高潔の風に乏し。<sup>(9)</sup>

ところでホーソーンの「牧師の黒いヴェール」(“The Minister's Black Veil” 1837)は、明治二十五年四月から五月にかけて十八公子により、「黒頭巾」という名で「女学雑誌」に訳出された。

「牧師の黒いヴェール」において、作者は、人間なら誰もが持っている、心の奥に潜む暗い罪の意識を探っていた。ハリー・レヴィンも言うように、この作品は「物語というよりは一種の説教」である。(a sermon rather than a story)<sup>(10)</sup> 従って、「己の世界に閉じこもり、ヴェールを通してしか現実を見ようとしなない牧師は、「説教者」の名を冠せられた一種の作者の代弁者だとも受け取れる。彼は世俗的な愛を一切拒む。

フーパー牧師はある朝、黒い布で顔を覆い会衆の前に姿を表わす。その布は牧師の顔にどことなく異様な感じを与えた。人々はヴェールを付けたその顔にある種の恐怖感をおぼえる。そのヴェールとは、

.....had reference to secret sin, and those sad mysteries which we hide from our nearest and dearest, and would fain conceal from our own consciousness, even forgetting that the omniscient can detect them. (H)

……秘密の罪と、われわれの最も近く親愛な人からも隠し、また万能の神が見破ることが出来るものを忘れて自らの意識にも隠そうとするような悲しい多くの秘密事に関連していた。

のである。しかもこのヴェールは最愛のエリザベスにすら、「あなたはどんなに人に愛され、尊敬されても、何か秘密の罪を意識して顔を隠しているのだと噂されています。だからそんな悪評を一掃するためにも、取り除いてほしい」(“Beloved and respected as you are, there may be whispers that you hide your face under the consciousness of secret sin. For the sake of your holy office, do away this scandal!”)<sup>(12)</sup>と懇願されても、「もしまた秘密の罪があるためにわたしが顔を覆っているとすれば他の者もわたしと同じように顔を隠さずにはおれないだろう」(“.....and if I cover it for secret sin, what mortal might not do the same?”)<sup>(13)</sup>とつぶつぶつぶつぶでもそのヴェールを取り除こうとしない。

では、この「秘密の罪」とはホーソンにとってはどのようなものであろうか。それは先の“Fancy’s Show Box”の冒頭でも直接取り上げているように、「人間は例えその手が綺麗であっても、心はいつの間にか大体罪の幻想に汚れているのであるから最も罪深い人に対しても、自分はそれと同類ではないのだと断定すべきでないのである」(Man must not disclaim his brotherhood, even with the guiltiest, since, though his hand be clean, his heart has surely been polluted by the fitting phantoms of inquiry.)<sup>(14)</sup>従って、牧師の黒いヴェールは、すべての人に持ち

合わせた罪の印であって、それは、「もしまた秘密の罪があるためにわたしが顔を覆っているとすれば、誰だつてわたしと同じように顔を隠さずにはいられない」ものでもある。しかもこの罪の感覚は、紅葉の作品にも同じように見出すことができる。

「心の闇」(明治二十六年)において、お久米がいざ、築居のもとへ嫁に行くことになる、そのお久米を佐の市は恐怖に陥れようとする。この佐の市には明らかに邪な嫉妬、つまり罪の意識がまつわりついている。

日頃、目が不自由なことを何ら苦にすることもなく、千束屋という旅籠屋に按摩として出入りしていた佐の市ではあるが、ある時この美しく気立てのよいお久米にお酌をさせ、その器量のよさを人目見たいものだと思書官内海、属僚三人、當縣知事が千束屋にやってきた。しかしそのことが世間の噂となり、お久米の嫁入りにも差し支えるところであったが、佐の市の奮闘によりその噂は取り払われた。ところがいよいよ、お久米が祝儀をあげる日取りが決まり、その日が近づいてくると佐の市の顔色もますますすぐれなくなってくる。

夫婦は不相變機嫌好くして遇へど、佐の市は玉火屋の洋燈の明るきに、寂き姿影の如く、見咎められて、大分色澤も悪く、何處とも無く羸れたる具合は病氣か、と銀臈に問はれて、何ともござりませぬと想氣無き挨拶。然りとは健れぬ處ありげに見えぬ。

佐の市の心は、築居へ嫁ぐお久米の祝儀の日に合わせて暗く、重苦しいものになっていく。つまり、心の奥に秘めた佐の市の恋心はお久米の嫁入りの日取りが迫ってくるにつれて、それに比例するように一層乱れ、迷妄の中に入っていくのである。雪の降る寒い夜、屋敷の回りをうろつき回っていた佐の市の気配を耳にしたお久米は驚愕にうち震

える。その後、お久米は佐の市のことを夢にまで見るが、結局、心を閉ざしてしまった佐の市の眼の前には本当の意味でのヴェールが下ろされてしまったのである。それゆえ、外から見たものの目、と言うよりむしろ、お久米の目には、佐の市の姿は、

お久米は異しき夢より、頻りに佐の市を疑へども、然りとは人傳にも聞きしにあらざれば、唯疑ふのみにて、眞偽を識らず。言はずして思ひ、疑ひて懼る。是も戀か、心の闇。

と言うふうにししか映らないのである。

佐の市の悩みは、言うまでもなく目が見えないことにあるのではない。それよりはむしろ、恋によってかき乱された心にあるのだと言える。

佐の市の邪な嫉妬心が心の罪と見るならば、佐の市の「秘密の罪」は黒いヴェールのように重く人々の顔の前に垂れ下がったものでなければならぬのである。「嫉妬」はいわば「秘密の罪」となって「大体罪の幻想に汚れ」、すべての人の心に潜む悪の根源となる。

もう一つ、ホーソンと紅葉の間に見られる類似性は、主題のパラドックスと言う面においてである。それは「牧師の黒いヴェール」が、知識も豊富で教養ある牧師の立場からの「秘密の罪」の問題を扱っているのに対して、紅葉の「心の闇」には、必ずしも経済的には恵まれない按摩の「秘密の扉」が扱われているということである。つまり、「牧師」という、世に尊敬されている人物の透視する眼に映るものはすべて不純なものとしてヴェールに覆い隠さねばならないのである。ところが、必ずしもそうではない「目盲」な按摩の目には娘、お久米の姿はまるで目あきのよ

うに純粹なものに感じられる。これら両作家の作品の間には、構成の上でちょうどパラドクシカルな関係を作っていると考えられる。

紅葉の作品には確かに、「巧みな翻案技術で、原作を気づかせないもの」があって、簡単には見抜けない所もある。だが、ホーソーンが作品が翻訳された時期と紅葉の作品の出版年代を見比べる中で、その主題を考えるならば、両者の間には明らかに影響関係が成立すると考えてよい。

#### 注

- (1) 『日本現代文學全集5 尾崎紅葉集』(講談社、昭和三十八年三月十九日発行)(作品解説、「尾崎紅葉入門」福田清人著)、四三三頁
- (2) 「女学雑誌」明治二十一年二月四日(第九十五號)一〇〇頁
- (3) Nathaniel Hawthorne, *Hawthorne's Works 1. Twice-Told Tales 1*, Vol. 1. "The Minister's Black Veil" (Boston and New York, Houghton, Mifflin and Company, The Riverside Press, Cambridge, 1900), p. 41.
- (4) Nathaniel Hawthorne, *Hawthorne's Works 1. Twice-Told Tales 1*, Vol. 1. "Fancy's Show Box" (Boston and New York, Houghton, Mifflin and Company, The Riverside Press, Cambridge, 1900), pp. 297-301.
- (5) 「女学雑誌」女学雑誌社、明治二十一年一月十九日(第一四五號)、一八一—二〇頁
- (6) 『日本現代文學全集5 尾崎紅葉集』(二人比丘尼色懺悔)、一六頁
- (7) 「女学雑誌」/「夢ならぬ夢」("David Swan") 明治二十二年一月五日(第一四三—一四四號)、「女学雑誌」/「心の浮画」("Fancy's Show Box") 明治二十二年一月一九日(一四五—一四六號)
- (8) 「女学雑誌」/「新天路曆程」("The Celestial Railroad") 明治二十三年一月
- (9) 「帝國文學」(第三號) 明治二十八年三月、「小説雜誌」、一〇五—一六頁
- (10) Harry Levin, *The Power Blackness*, (ALFRED A. KNOPF NEW YORK, 1967), p. 42.

- (11) Nathaniel Hawthorne, *Hawthorne's Works 1. Twice-Told Tales*, Vol. 1. p. 44.
- (12) *Ibid.*, p. 53
- (13) *Ibid.*, p. 54
- (14) *Hawthorne's Works 1. Twice-Told Tales*, Vol. 1. "Fancy's Show Box", p. 306
- (15) 『日本現代文學全集』 尾崎紅葉集 (「心の闇」) 四〇頁
- (16) 同上「心の闇」 四十五頁